特集★図書館の話題アラカルト

クラウドファンディングによる資料費獲得への取り組み

――図書館員はクラウドファンディングの夢を見るか？――

大和田康代・石津朋之

1．はじめに

筑波大学附属図書館（以下，当館）では年々縮減する紙媒体資料の購入費確保を目的としたクラウドファンディング（以下，CF）プロジェクトを実施した。本稿では実施の背景と経緯を述べた後，実施を通して得られたものを報告することで今後の他機関における検討の一助とされたい。

2．国立大学図書館の現状

本稿の読者に公共，学校図書館等他館種の関係者が多くいることを踏まえ，まずは大学図書館および国立大学の現状を概観する。

大学図書館では図書館経費そのものの削減に加えて，電子ジャーナル経費の高騰が紙資料の購入費を顕著に圧迫している（図1）。当館職員も，日々接する学生たちに将来につながる豊かな読書体験を提供したいという想いがありながら，十分な資料費を確保できていないことに歯がゆさを感じてきた。

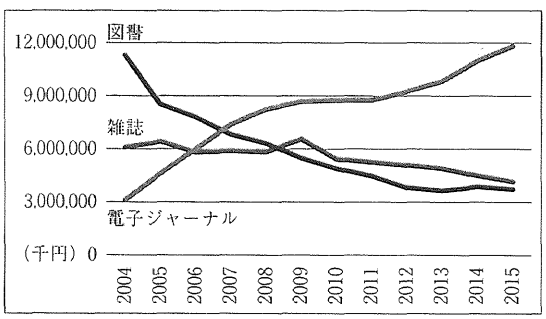

図1　国立大学図書館経費（学術情報基盤実態調査より）

大学そのものに目を移すと，2004年の国立大学法人への移行に伴い自律的な運営が促され，大学予算の半分近くを占める運営費交付金が年々縮減されている。各大学は法人運営費の確保に苦慮しており，大学本部から各部局，教職員に対しても科学研究費や共同研究・受託研究，寄附金等，多様な財源の確保への取り組みが推奨されている。

3．プロジェクト実施に至る経緯

筑波大学においても外部資金獲得が推奨される中，CF事業を手がけるREADYFOR株式会社（以下，READYFOR）と筑波大学は，民間事業者と国立大学との間では初となる業務提携を2017年1月26日に発表した。提携後初となる本プロジェクトは筑波大学の財源確保におけるCFの可能性を測るという役割も帯びていた。当館では若手職員を中心とする有志のプロジェクトチームを結成し，2016年12月末からREADYFOR担当者との打ち合わせを開始した。

図書館によるCFとしては松竹大谷図書館や東京藝術大学附属図書館が先行していたが，いずれも歌舞伎台本やSPレコードといった特徴的な資料のデジタル化や保存を目的とするものだった。これに対して当館では前述の事情により，かねてより資料費確保のための収益事業の可能性を模索してきた。大学とCF事業者との提携に際して財務部から，端緒となるプロジェクトの提案を打診された際に，紙の資料費獲得を目標に掲げたのも以上の経緯によるものである。

実施にあたっての具体的な準備はプロジェクトチームが行った。READYFORの担当者からは，準備段階では支援者に訴えかけやすい言い回しや写真の選定についての助言，プロジェクト開始後はREADYFORのメールマガジンによる寄附の呼びかけの協力等を得られた。

4．プロジェクト開始から終了までの状況

本プロジェクトは業務提携の報道発表に合わせて1月26日に開始した。公開当日には大学公式ホームページでの広報に加え，当館ホームページの「お知らせ」やTwitter，Facebookへの投稿に

よる情報発信に努めた。この結果，開始から５日で目標金額の20%に到達することが成功の一つの目安とされる中，開始６日後の１月31日には当初の目標金額300万円に到達した。これを受けて「ネクストゴール」として500万円を新たな目標に掲げ，プロジェクトの対象を各専門図書館に配架する資料にまで拡大したが，こちらも最終日の前日には達成し，３月31日のプロジェクト終了時点で延べ307名（実数300名）から5,124,000円の寄附が寄せられた[1)]。

5．学内外の反応

本プロジェクトについて，学内では筑波大学新聞（学生が発行する学生新聞）から取材の申し込みがあった。また，学外ではプロジェクト開始時に新聞数社に取り上げられたほか，大学図書館界からの関心も高く，プロジェクト終了後には関係会議等での報告を行った。特に大学図書館問題研究会の例会ではノウハウを知りたいという質問が寄せられる等，CFに関心を寄せる機関が多いことがうかがえた。

6．プロジェクトを終えて

今回のCFは，これまでにあまり例のない「成功と失敗が目に見えてわかるプロジェクト」に取り組んだ事例となった。定められた期日までに目標金額の達成という成果を挙げる必要があること，図書館利用者にとどまらず幅広い層にPRするため広報の内容・表現ともに慎重な検討と迅速な対応が求められること等，相当な緊張感はあったが，今後もこのような取り組みは重要になるものと考える。

本プロジェクトでは寄附者からのコメントが職員の大きな励みとなった。卒業生や図書館利用者から「学生時代お世話になりました」「いつも利用しています」等，自身の体験に引きつけたコメントが寄せられたことで，日々の業務に一層のやりがいを感じた職員が多かった。また，本プロジェクトで大学図書館の窮状を初めて知ったという声も多く，現在の大学図書館の置かれた状況を発信し，大勢の方に知ってもらえたことも大きな収穫であった。

反省点は何よりも準備時間の不足である。第一に，寄附の集まりが予想以上に速く，初期対応が後手に回ったことが挙げられる。前述のとおり，本プロジェクトは開始６日後に最初の目標金額を達成した。早期の目標達成を喜ぶ一方で，新着情報の投稿計画の大幅な変更やネクストゴール設定の検討等，さまざまな対応に追われることになった。第二に，資料の選定や装備を行う各担当に対し実務的な対応を依頼するのが遅れたことが挙げられる。これはプロジェクトチームが若手の有志を中心に構成されており，館内会議等での情報提供が不足しがちであったこと，有志であるがゆえに明確な命令系統がなく，迅速な意思決定が難しかったこと，メンバー６名のうち４名が勤務年数５年以下の職員で，未経験の業務にかかる時間の見通しが難しかったことが主な原因と考えられる。今後新たにプロジェクトを計画する際には，十分な準備時間を確保すること，早い段階で実務担当者を交えた打ち合わせを行って情報を共有・周知すること，状況の変化に即応できる意思決定の体制を整えること等が重要と考えている。

7．今後の展望

図書館予算の減少という切実な状況を受けて始まった本プロジェクトは，幸い予想以上の寄附を集めて成功した。しかし，寄附者のコメントやTwitter等の投稿の中には「継続的な資金の調達が必要なのではないか」「一時的な金策よりも根本的な財源の確保に取り組むべきではないか」というものも多かった。こうした声を真摯に受け止め，今後も安定的に資料購入費を確保するための方策を探っていきたい。また，本プロジェクトを一過性のものとして終わらせるのではなく，今回得られた支援者とのつながりを保つこと，継続的に図書館の動向を気にかけてくれる「図書館の味方」を増やすこと，新たな支援の輪を広げることを目指して，今後もさまざまな活動に取り組みたいと考えている。

注

1）"資料費減少で危機。大学図書館に本を購入し若者に十分な学ぶ場を". Readyfor. https://readyfor.jp/projects/tsukubauniv-lib.（参照2017-06-06）.

（おおわだ　やすよ，いしづ　ともゆき：筑波大学）

［NDC10：017.7　BSH：1.大学図書館　2.図書館経営］